

## 随 想

# に お い

理学博士 岡山大学教授 松 本 邦 夫

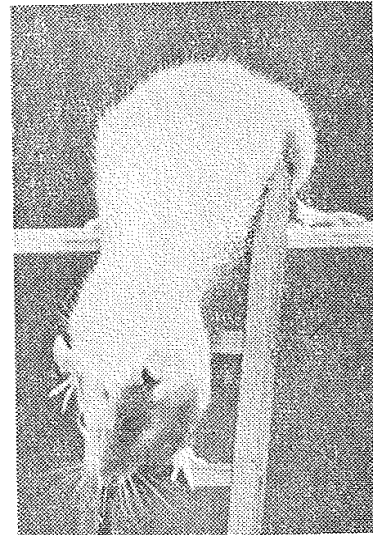
健康な若い女性の体臭や洗い髪のほのかな香りは男性の心をときめかせる。その心のときめきでたちまち鼻の下を長くする連中は、ジャコウ鹿やジャコウ猫が肛門のちかくから強烈なにおいを発散して異性をひきつけ発情期の直接行動を演ずるとの少しもちがわない。また、心のときめきを、これはいけると思った連中は、においのもとを精製したり混合したりしてシャネル5番やウビガンの香水を作りあげ、世界中の財布から金をまきあげている。もう1組ごく少数の変り者たちであるが女のにおいで男心が、男のにおいで女心が何故ときめくのだろうと妙なところに頭をひねっている連中がある。彼等はまだまだ直接行動や金もうけほどに効果をあげてはいないがコツコツと研究をつづけている。実験はまだ鼠や兎の段階であって牛や馬には応用できないが、関心をもっていたら幸いである。

まず第1に今までほとんど無視されていた「におい」の感覚が、案外生殖器の発育に直接関係しているのである。鼻の奥の方で鼻神経を切って無臭覚にされた雌の鼠は卵巣や子宮の発育が悪く、膻はふさがったままで発情しない。たまたま卵巣から排卵がおこってもそのあとにできるはずの黄体が委縮してしまって役に立たないのである。しかしこれだけの観察で結論を出すのは早計である。この鼠は鼻が役にたたないのだから食物が不十分だろうし、栄養失調で卵巣や子宮が縮んでしまったと考えることもできるわけである。終戦後の食糧事情が極度に悪かったころ、闇食糧の買い出しに大いに鼻をきかせた奥さんたちでもメンスがとまってしまったかたが多かったことはご存知の通りである。

そこで次の実験が登場する。

はじめは鼻も目もある完全な雌の鼠であるが、雄と同居させてうまく意気投合し、「高砂やー」で交尾を終わった。その時、雄を引きはなして第3の男を同居させる。そうすると前の雄との事情でたしかに

妊娠せねばならないはずの雌が妊娠しないのである。そこで今度は雌の鼻に手術をして無臭覚にしておく、あとからいかに強く、たくましく、強烈に男くさい男の中の男1匹を入れてやっても雌は知らぬ顔の半兵衛で、みごとにはじめの雄



との愛の結晶を妊娠し分娩するのである。実験は更に進められているが話を簡単にして結論を申し上げよう。交尾した雌はさっそく脳下垂体から乳腺刺激ホルモンや黄体刺激ホルモンが生産されて妊娠分娩となるのであるが、そこに第3の男が登場するとその男の体臭が（においでず）ホルモンの生産を妨害し、せっかく授精した卵が子宮の壁におちつくの妨げてしまうのである。その原因が「におい」であることは鼻に手術をして「におい」がわからなくしておけば無事であるし、そこにホルモンの欠乏がおこることは、あとからホルモン注射で補ってやれば妊娠できることから立派に証明されているのである。もう1つ、こんな実験もある。今度は雄の鼠に不妊手術をしておく。この雄は交尾の行為だけは立派にやっつてのけるが精子がでてこないの雌は絶対に妊娠しないのである。ところが現実には、このような雄と交尾した正常な雌鼠の大部分は想像妊娠（偽妊娠）をおこして腹がふくれたり乳房が大きくなったりする。そこでこの場合にも、はじめに雌の鼻を手術で無能にしておく、不妊の雄がいくら馬力をかけて交尾をやっても想像妊娠などというつまらぬミステークはおこらない。この実験でも妊娠という現象、厳密には妊娠をおこさせ支持するホルモン

## 岡山畜産便り 1964.10・11

の分泌が「におい」によって相当大きく左右されるという証拠が示されているのである。

家畜や家禽を飼うときに通風、採光、湿度、温度、栄養はもちろん、著るしい騒音に対してもすでに畜産家はいろいろの配慮をしておられるが、やがて環境の「におい」にも注意工夫せねばならない日がくるのではなかろうか。